山城・銭司遺跡出土の坩堝・鞴端口の紹介

丹　野　　拓

銭司遺跡は京都府相楽郡加茂町大字銭司小字金鋳山に位置する鋳銭遺跡である。遺跡は恭仁宮からは東に約2.5km、平城京からは北西に約10kmの位置にあたる。『日本三代実録』貞観7（865）年9月26日の条「山城国相楽郡岡田郷旧鋳銭司山に於いて銅を採らしむ」に存在の知られる鋳銭司に比定され、山城鋳銭司、あるいは岡田鋳銭司と呼ばれている。その設置時期は栄原永遠男氏によると、天平7（735）年と考えられている。

銭司遺跡は明治の初め、坩堝や和同開珎が相次いで発見されたことから、その存在を知られていた。そこで、京都府史蹟勝地調査員であった梅原末治氏は、大正12（1923）年に発掘調査を実施した。また、昭和49（1974）年には加茂町教育委員会により国道工事に伴う調査が行われ、炉跡などが検出された。両調査の成果は、それぞれ『京都府史蹟勝地調査會報告第四册』、『銭司遺跡』において報告されている。

さて、本学博物館所蔵の銭司遺跡出土資料は大正3（1914）年に本山彦一氏が金鋳山の東南隅の竹薮を発掘し、得た遺物を譲り受けたものである。坩堝片、鞴端（羽）口片、銅滓、土器片からなる。完形品はなく、坩堝11片、鞴端口18片が確認できる。

銭司遺跡出土の坩堝は、前述の報告書により、坩堝は単純な口縁のもの、帯状口縁のもの、前二者より薄手のもの、の三型式に分類されている。しかし、資料数が少ないため暫定的な分類にとどまり、本学博物館所蔵品に当てはまらないものが多い。そこで、まず当館所蔵の坩堝を四つの形態に分類しここに紹介する。

①は単純な口縁をもつものである。外面に精良な土を用いて仕上げているが、口縁付近と底部では剝落している。口縁端部から内面には銅を多く含む暗紫色の付着物が薄くこびりつき、その上層には鉄を多く含む黒色の塊状の付着物が残る。他に同一形態の資料1点がある。

②は口縁が帯状とまではいかないが、内側に三角形状に角張るものである。同様の形態のもの1点を所蔵する。なお、①についても、部分的に口縁が膨らみ②に近い形態をなしているといえる。

③は口縁端部に1.5cm弱の平坦面をもつ。口縁付近の厚さは約2cm、底部付近は3cmを越える。図示した断面部分は幸い付着物が少ないが、口

写真1

縁の内側5㎜ほど下から底部にかけて全面に黒色の気泡の痕跡の残る付着物が付着している。付着物の表面に一部緑青がみられる。この型式の完形品として、喜田常太郎氏が小字「和銅」で発見した坩堝があげられる。口縁に平坦面をもつ形態は従来設定されていなかったが、長門・周防の鋳銭司遺跡の資料に多く見られるので、注意が必要かと思われる。

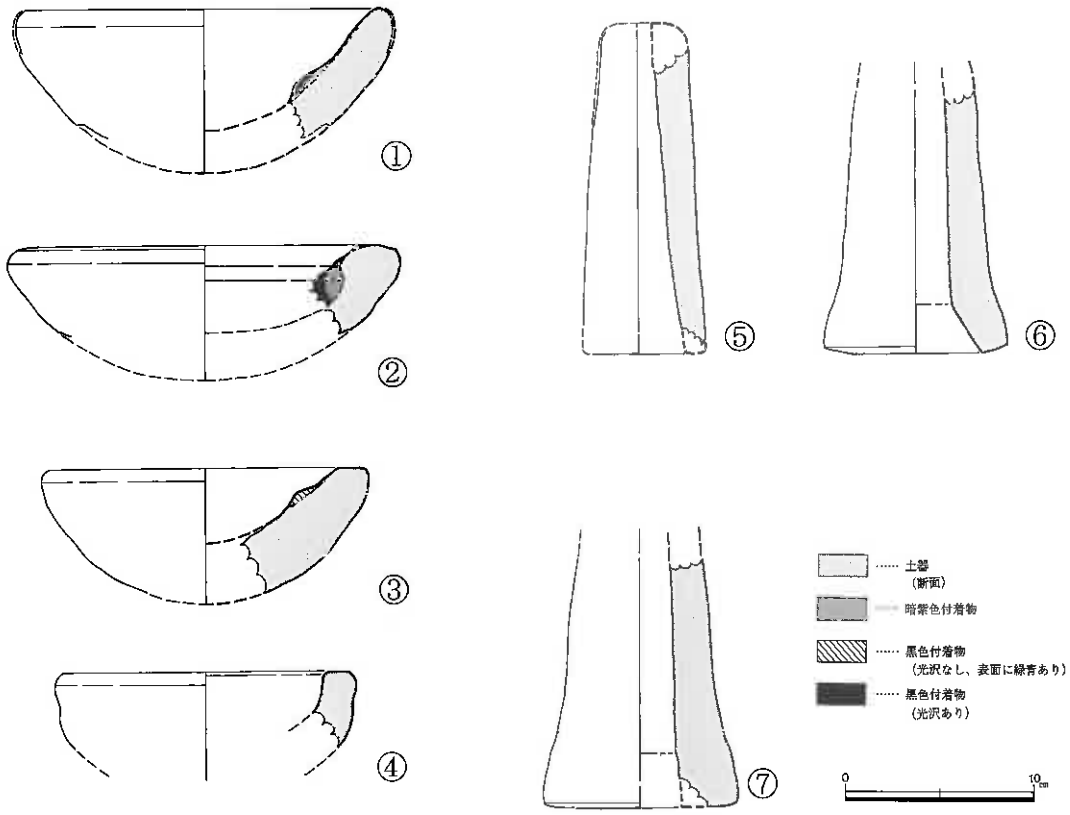
④も口縁端部に平坦面をもっている。③よりは薄く、従来薄手と分類されているものよりはやや厚手の作りである（口縁付近で厚さ2.0～2.2cm）。その口縁外壁には、指頭圧痕がくっきりと残っている。同様の資料が他にも一点あるが、共に坩堝として使用された痕跡は無い。

坩堝内に付着する銅滓の分析は『銭司遺跡』に詳しく、現在の精錬技術と比較し、厚手の坩堝（①～③に相当）は銅の原料に珪酸を加え鉄分を除去する溶錬の段階に使用し、次いで薄手の坩堝（④に相当か）では、珪酸は加えずに製銅の段階を行なった可能性が指摘されている。

次に、鞴端口について紹介する。鞴とは製・精錬に際して送風を行なう装置であるが、熱を受ける通風口には土製の端口を取り付ける。写真の右隅の鞴端口に示したように、先端部に銅滓が付着している場合が多い。端口は筒型のものと考えられるもの（図⑤）1点と、朝顔型に基部が開くもの4点を所蔵している。後者は基部内面にくっきりした段を持つもの（図⑥）と、段がはっきりしないもの（図⑦）がある。なお、実測図については、⑤を除き、回転復原を行なった。

また、本学博物館では他に、長門鋳銭司跡に比定されている山口県下関市覚苑寺境内出土の資料を所蔵している。資料には坩堝・鞴端口・和同開珎の笵型があり、山城銭司遺跡出土資料と共に、その有する価値は大きいといえよう。

（関西大学大学院生）



実測図1